

②「教育実習ルーブリック」を活用しての学生指導の実際

泉 豊（上越教育大学附属小学校 主幹教諭）

附属小学校の泉豊と申します。よろしくお願ひいたします。

附属小学校における本年度の教育実習ルーブリックの活用としての学生指導の実際についてご説明いたします。本年度は教育実習ルーブリックの完成をめざした運用の準備段階でした。来年度からの教育実習における教育実習ルーブリックの活用について、主に教育実習生が活用した例を紹介しながら成果と課題を示してまいります。

学部3年生のAさんは大学の授業での指導を受け、教育実習前に教育実習ルーブリックの項目に目を通して、自分がどのステージにいるのかということを確認しました。それから教育実習に臨むにあたってAさんは一つの目標を設けました。それは子どもの前に姿勢よく立ち、発問、板書の整った授業をルーブリックや指導書などから作った計画通りに展開するという事です。

Aさんは教材研究をしてねらいをもち、教材教具を整えた授業を計画し、その計画に従った授業をどのように進めればよいのかということをお細かくチェックしながら授業の準備を進めていったのです。

Aさんは後期の本実習の3週間にわたる教育実習の1週目にも、教育実習ルーブリックに示された項目を見てどのようなことに留意することが大切なのかを確かめて教育実習に臨みました。

ところがAさんは1週目の終わりに教育実習への自分の取組を振り返った時、ほとんど教育実習ルーブリックを見なかったことに気がつきました。同時に目の前の子どもの姿をもとにして発問や活動を考え始めている自分に気がつきました。「授業を展開するためにどのようなことが大切になるかということが少しずつだけれど何となくわかってきた」というAさんの言葉は、教育実習ルーブリックやいわゆる指導書だけではできない授業づくりを感じ始めた姿です。

2週目に入ったAさんは子どもの姿から授業を作ろうと思ひ始めるようになりました。授業を計画通りに展開するというAさんの目標は子どもの考えをつないで作る

授業に変わったのです。この目標はお手元の教育実習ルーブリックの4、教員として求められる教科等の指導に関する項の

26、27、28、29などの内容に関すると考えます。

しかしAさんはそれら一つ一つを目標として掲げるのではなく、教育実習の実際から自分の言葉で目標を設けるようになったのです。Aさんを担当した教諭は「このころからAさんの発問や指示が具体的になり、また子どもの発言を生かして授業を進めようと努めていることが伝わってきた」と述べています。

Aさんは3週目にも子どもの考えをつないで作る授業をめざしました。そして日々の子どもの姿をもとに授業で子どもがどのような考えを述べるのかを予想し、それに応じて授業を展開することに力を注ぎました。

しばらく教育実習ルーブリックを見なかったAさんは、教育実習の終わりに3週間の教育実習に取り組んだ自分を振り返る手がかりとして、教育実習ルーブリックを見直そうと思ひました。Aさんは教育実習ルーブリックの一つ一つの項目を読みながら、後期の3週間にわたる教育実習での自分の成長と課題を実感しながら、教育実習を振り返って授業をしっかりと進めること、児童の反応をもとに授業を作り上げていくことなどさまざまなことを考え、教育実習ルーブリックを利用しながら「取り組んだ教育実習では、自分自身のことを一番多く考え、自分の足りないことにたくさん気づくことのできた貴重な経験になった」という感想をもちました。Aさんのように教育実習生の多くは教育実習ルーブリックの項目と子どもの姿、この二つを往復しながら教育実習を充実させていきました。

その利用場面は次の二つです。一つは、教育実習に臨むための利用です。二つは、教育実習中の取組の確認と



教育実習後の取組の振り返りです。

また教育実習を担当する教員も教育実習ルーブリック利用の場や方法は次の二つです。一つは、教育実習生への指導の参考としての利用です。二つは、評価の目安、観点としての利用です。

大学の学生、教員と教育実習受入校の教員との指導評価に関する共通の捉えがあることはとてもよいことと考えます。今後教育実習の総括としての振り返りや教育実習ルーブリックの一つ一つの項目の評価だけに終わらないよう留意する必要があります。

教育実習を人間教育の場、キャリア教育の場として捉

えるのであれば、教育実習生が自分の取組を総合的に内省していくということを大切にしたいからです。

また指導にあたる私たち教員はチェックのためだけの教育実習ルーブリックにすることなく、いろいろなタイプの教育実習生の個性や持ち味を見極めながら、教育実習生を指導する一つの拠り所として利用していくことが大切だと思います。

よりよい教育実習を作り上げていくための例をほかの学校に紹介していくようなことも大切だと考えています。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

③上越教育大学と地域、そして「私」

及川 未希生（上越教育大学 4年）

皆さんこんにちは。上越教育大学学校教育学部4年及川未希生です。本日は上越教育大学と地域、そして私ということを受けまして、私が上越教育大学でこの4年間学んできたことをお話させていただきたいと思います。

まず本題に入る前に私がこの上越教育大学でどんな学生生活を送ってきたかというのを簡単にお話したいと思います。私は上越教育大学のフレンドシップ事業であります学びクラブ、「学びの広場」という活動を4年間続けてきました。この活動は年6回の活動の中で大学キャンパスに子どもたちを呼んで、子どもたちとの関わりの中から、子どもの理解、それから子ども同士の関係づくり、それから学生同士を含めた人との関わり合いを学んでいく活動です。

4年間活動していく中で私はさまざまな人や物、場所と出会うことでいろんな活動のフィールドを広げていきました。このようなバックグラウンドを考えまして、私は今回出逢いは人生を変えるというテーマで皆さんにお話をしたいと思います。

まず初めに「3日に1回」という言葉をキーワードとして挙げてみました。この「3日に1回」とは本年度、私が国立妙高青少年自然の家に行った回数です。写真は本年度の8月に行われました国立妙高青少年自然の家の

主催事業「キャンプとお手伝いの旅」で、私が子どもたち5人とキャンプカウンセラーとしてキャンプを行っている様子です。



3日に1回といいますと1年間におよそ120日の、「本当になんだ、それは」というくらい自然の家に行っているわけですが、一体この120日間の間、いったい何をしているのかというのを次に挙げてみました。

まず「ボランティア養成所」、それから各種「自然体験プログラムの体験会」などの各種セミナーの受講に行きました。それから先ほど紹介しました「キャンプとお手伝いの旅」、それから今年度から行われております「妙高フレンドスクール」のキャンプカウンセラーとして参加させていただきました。それから青少年自然の家を利用する多くの小学生、中学生、高校生、それから一般の人の人間関係づくりのお手伝いをする「妙高アドベンチャー」の講師としても今年度は活動させていただきました。

した。それから妙高親子スキーであるとか妙高感謝祭など、妙高の各種イベントのスタッフとしても参加させていただきました。

このように今となっては自然の家を非常に多く利用しているわけですが、実は自然の家を利用するきっかけとなった活動がありました。それは昨年度行われました「全国フレンドシップ」という活動です。昨年度で第8回を数えまして上越教育大学が主管校で開催させていただきました。

この第8回全国フレンドシップで私は実行委員長という立場でやらせていただきまして、5泊6日の長期宿泊研修を全国9大学の教員養成系の大学の学生たちと子どもたちとの関わり方を学びながら、そして教員としての資質を高めることをねらいとして行いました。

これを行うことは3年生の春に決まっていたのですが、やるにあたって上越教育大学が主管校として全国に誇る活動をしていくためには、妙高というフィールドを知っていかなければならないと思ひまして、3年生の春先から毎週のように妙高の自然の家に通って、妙高を勉強させていただきました。

私はもともと岩手県の山の中で育ちまして、その影響で妙高自然の家にとっぷり浸かっていくことになりました。3年生の時、それから本年度も参加させていただきましたが、文部科学省の委託事業、豊かな体験教育推進事業の一環として行われております「キャンプとお手伝いの旅」に2年連続で参加させていただきました。

15泊16日の長期宿泊体験事業、小学4年生から6年生までの子どもたちが自分たちの力だけで生活していく、『「活動プログラムのない」プログラムです』。朝起きて夜寝るまでの間を、子どもたち自身で考えていくというキャンプです。私はこの中で子どもたちの気づきを支援しながらサポートさせていただきました。

それから本年度、全部で3ブロックに分かれて行われました「妙高フレンドスクール」にも参加させていただきました。妙高市の小学6年生全員が自然の家で6泊7日の長期宿泊体験を実施し、夕方から朝方までの子どもたちの生活指導、それから最終日のオリジナル活動のサポートをしてきました。

自然の家に通って行く中で教育実習に生きる部分が多くありました。3年次はご存じのとおり分離方式の教育実習ということで、上越市立古城小学校の5年生を担当させていただきました。5月に1週間行ったあと、私は

その研究期間を使って自然の家に行きました。ちょうどキャンプとお手伝いの旅に参加させていただき、子どもたちの前でどのように立って、どのような目線で子どもたちと関わっていくことが大事なのかということをお学ばさせていただきました。

それから本年度は上越市立直江津中学校の体育科で3年生を担当させていただきました。国立妙高青少年自然の家で学んだこと、得たことが基とのなり、自信をもって子どもたちの前に立て、余裕をもって教育実習を進めることができたと感じています。先生方からも非常に高い評価をいただきまして、私自身も充実した教育実習を送ることができたと感じています。

ここで4年間を振り返ってみたいと思います。まず1年目、フレンドシップ事業学びのひろばに1年生の時から参加していますが、高校生に毛が生えた程度の私たち、入学した時に一番ありがたかったのは1年生の時から子どもたちと関わる体験というのが多くできたということだと思います。子どもたちと関わる楽しさ、自分がなぜ先生になりたかったのかなというその初心に戻るような気持ち、そういうものを気づかせていただいたと思います。

そして2年目、学びのひろばは2年生が主体として活動していきますので、2年目に早くも子どもたちの前に率先して立っていかなければいけないという状況になります。

その中で思うように子どもたちが動いてくれなかったり、それから学生をうまくまとめることができなかつたりというようなところで、自分たちの実力のなさというのを知ったのかなと思います。

その中で3年生になって2年目を踏まえて実力とは何か、自分は子どもたちの前に立つために何が必要なのかということをお考え、私は妙高に頻繁に通うようになりました。そこで得られた理論やスキル、子どもたちの前に立つために子どもたちの注意を引き付けるためにはどうすればよいのか、そういうことを考えていく中で、教育にはバックグラウンドが必要なんだなということをお考えました。

先ほどもお話ししましたが、小学校実習の研究期間、キャンプとお手伝いの旅という貴重な体験をさせていただきまして、経験、理論的な考え方に触れる機会がありました。子どもたちの前に立つためのバックグラウンドの構築、それから体験学習法、プロジェクトアドベンチャー

の考え方などを学ぶことで、小学校実習を進めていく上で大きな力になったと思います。

4年目は第8回全国フレンドシップを皮切りにキャンプとお手伝いの旅の2年目に参加させていただき、それから妙高フレンドスクールにも3回参加させていただきました。それから先ほどお話ししました妙高アドベンチャーの講師としても、本年度は新潟県、県外も含めておよそ20校程度の子どもたちの自然体験学習のサポートをさせていただきました。

このような4年間で踏まえてフレンドシップ事業、上越教育大学ではこの1年目、2年目にまず自分の実力、それから子どもたちとは何なのかというところを知る。それから小学校教育実習を含め、自然の家等ボランティアを重ねる中でそれを学びとっていく。その学びとった理論やスキルというのをまた教育実習で試していく中で、また今後のさらなる課題というのを見つけてこれたのかなというのを感じています。

私は、来年度大学院へ進学してさらに勉強したいと思いついて採用試験は志願しませんでした。その中でなぜ来年大学院に進学しようかなと思ったかというのは、この大学、特に僕が感じていることなんですが、教員になることがゴールの学生が多いのではないかなというのを感じています。採用試験をパスすれば自分の夢は達成だ。でもそれはおかしいんじゃないかなと思います。今お話の中でもあったように、これから教員になる私たち学生

としては、教員になってから何をしたいのかということを考えていくことは非常に重要なことなのではないかと私は考えております。

私の中で何が足りなかったのです。あと2年この上越で学ばせていただきたいなと思いついて大学院に進学することにしました。後ろに後輩がたくさん来ていますが、私は教員になるのがゴールではないんだということをお伝えしたいなと思います。

この上越教育大学で非常に多くのことを学ばせていただきました。素晴らしい仲間にも巡り合えました。先生方にも出会えました。素晴らしい地域の方々にも支えられながら4年間を送ることができました。その中で私はここで学んだことを生かしつつ、私は私の道で教員の道に入っていきたいなということを強く感じています。

本日は出逢いは人生を変えるというテーマでお話を進めていきましたが、最後にあいだみつをさんのこんな詩を送りたいと思います。「その時の出逢いが人生を根底から変えることがある。よき出逢いを」ということで、皆さんに最後にこの詩を送って終わりにしたいなと思います。

あと2年間私は上越でさらに勉学に励んで頑張っていきたいと思います。そして2年後には必ず教員として現場に出て、日本の未来を背負っていけるような存在になりたいなと思っておりますのでどうぞよろしく申し上げます。本日はご清聴どうもありがとうございました。